# 時流を読む

## 自然栽培で移住促進

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

### 環境保全型農業で地域おこし

佐渡の「朱鷺と暮らす郷づくり認証米」や豊岡の「コウノトリ育むお米」は、全国でもけっこう知られるようになり、自然豊かな環境が都市・農村交流をもたらすとともに、高価格での販売を実現することによって農家経営への貢献も大きいとされる。いずれも地元JAと自治体とが一体となって推進してきたところに成功のカギはあり、こうした取り組みが広がりを見せつつあることを実感する。

こうした中で、石川県の羽咋（はくい）市が自然栽培によるまちづくりを宣言したとの記事（季刊『地域』11月号）には正直、驚かされた。

### JAと自治体が連携

羽咋市は、能登半島の付け根の西側にある人口2万2000人ほどの小さな地方都市である。3年程前に、友人で当地出身の児童文学作家・芝田勝茂さんから、いとこが地元JAで組合長としていろいろチャレンジしているとの話を聞き、富山での用事を済ませた後に足を延ばしてみたことがあった。

羽咋市について事前にまったく知識は持ち合わせていなかったが、かつて話題になった本『ローマ法王に米を食べさせた男』の著者が羽咋市役所に勤める高野誠鮮さんであることを現地で知った。

この高野さんが『奇跡のリンゴ』で知られる自然栽培家の木村秋則さんを招いて2010年2月の講演会開催を企画した折、JAに共催を呼びかけ、これを受け入れる決断を下したのが当時組合長の芝田正秀さんであった。これを口火に、3年にわたって年6回、自然栽培実践塾を重ねてきた。本塾は農協と市の共催とし、その実務は農協が中心となって担ってきた。その後、木村さんを中心とした内容の塾から、自然栽培に加えてエコ栽培のコースも組み入れ、研修農場を舞台にしての「のと里山農業塾」にステップアップして2014年から継続している。

### 「自然栽培の聖地になる！」宣言

木村秋則さんの講演会や自然栽培実践塾には全国から人が集まってきたが、こうした中から当地に移住・定住して自然栽培に取り組む人たちも出てきた。こうした動きを踏まえて羽咋市は昨年策定した「地方版総合戦略」で、「自然栽培の聖地になる！」ことを宣言した。ねらいは環境づくり等にとどまらず、自然栽培を梃子にして全国の若者をひきつけ、移住を促進していくところにある。2年目の今年度は自然栽培農家20人、21ヘクタールの計画がほぼ達成可能な状況にあり、2020年には50人、1000ヘクタールを目標にしている。

### 変わる若者の農業・農村観

研修農場に足を運んだ際に、ここで養蜂をしている女性にお目にかかった。彼女は埼玉県在住のサラリーウーマンで、金曜夜に高速バスに乗り、朝、金沢でレンタカーに乗り換え、車で1泊しながら作業をしたうえで埼玉に戻るという。若者の農業・農村を見る目、距離感は大きく変わってきている。